

第11回せんがわ劇場演劇コンクール 受賞者インタビュー グランプリ・劇作家賞 ほろびて 細川洋平さん

- ほろびて
細川洋平を中心に活動するソロ・カンパニー。長い活動休止を経て、2015年より小さな舞台空間で時間／認識といったテーマを軸にした作劇を続け、定点と流動の双方から創作を進める。
- 細川洋平
主宰・劇作・演出・俳優
78年2月14日、埼玉県出身。早大演劇倶楽部を経て水性音楽を結成。また、客演として劇団猫ニャーに出演後、演劇弁当猫ニャーで劇弁員となる。両劇団解散後、ほろびてを立ち上げる。

◆『あるこくはく [extratrack]』

2021年6月19日（土）ー21日（月）@SCOOL

作・演出 細川洋平

◆さいたまネクスト・シアター『雨花のけもの』

2021年8月5日（木）～15日（日）@彩の国さいたま芸術劇場 小ホール

脚本 細川洋平

◆ほろびて 新作公演

2021年10月27日（水）～11月1日（月）@北千住BUoY



今回第11回せんがわ劇場演劇コンクールでグランプリ、劇作家賞、そして出演された吉増さん（父親役）が俳優賞も受賞された、ほろびての細川洋平さんにお話を伺いたと思います。まず最初に、今回のグランプリ受賞の率直な感想をお聞かせください。

他の団体との比較ではなくて、自分たちがつくれるもの、つくったものをただ上演できるだけでいいし、作品そのものに納得できていればどんな結果であってもいいですよという話をしていたので、グランプリという結果は驚きました。

僕としては吉増さんが俳優賞を受賞したことがすごく嬉しいです。

今回上演された『あるこくはく』という作品について、細川さんが考えていらっしゃったコンセプトや、どんな想いで書かれた作品かということについて教えてください。

アフターディスカッションでもお伝えしたのですが、コンクールに応募した当初は去年（2020年）までに起きたことや、それに連なる過去の出来事を書いていこうと思ってたんです。

でもコンクールの開催が延期されて一年経って、コロナの影響もあってあまりにも状況が変わりすぎていた。さらに「僕に今、それを書くモチベーションがあるのか？」という葛藤も生まれていました。

そもそも今年もコンクールが開催できないかもしれない。開催が確定してからしっかり考えようと思っていました。

そうして「どうやら開催しそうだぞ」「無観客でも開催しそうだな」というタイミングで考え始めたのが今回の作品でした。

自分の中で引っかかっていること、テーマというか、書きたいものの一つに「理解できない価値観に対してどういう反応を示すか」ということがあったので、今回はそれを糸口にしようと思って書き始めました。タイトルは応募時のままです。

アフターディスカッションでも言ったのですが、芸術に対してもそうですし、異文化や、例えば僕が大好きなアニメとかアイドルに対してもまったく理解を示さない人、「そんなもの必要ない」という人、嫌悪する人はいるんですよ。

何かの存在を頭から否定するということがすごく自然に行われる場所もあるんだな、ということをもっと実感した出来事があった、悔しいなあと思ったのが最初でした。

誰かにとってはとても大事なもの。だけど多くの人にとっては価値がないと思えるようなものは何かな？というところから「石」というアイデアにたどり着きました。

石は世界的にも割とメジャーな存在というか（笑）、地球ができて割と早い段階で登場して、それ以降ずっとあるけど、普段自分たち人間が気にも留めずに蹴ったりしているものだな、と思って。

『カラマーゾフの兄弟』（ドストエフスキー）にも、カラマーゾフ家の三男のアリョーシャが、川越しに石を投げている子供たちに出会う場面がありますよね。それを思い出したりもして、もしかしたら「石」は印象的なモチーフになるかもしれない、と考えました。

特別審査員の皆さんからもあの「石」のアイデアに対する称賛の声が多く上がりました。その着想が『カラマーゾフの兄弟』から来ているというのはとても興味深いお話でした。

今回せんがわ劇場で作品を上演されてみていかがでしたか？

すてきな劇場だと思いました。せんがわ劇場には「劇場独特の空気感」があって、お客さんがとてもワクワクするような空間だなんて。

今回非常事態宣言下だったこともあり予定していた稽古場が全部なくなっていました。どうかお知り合いの伝手で借りることができたマンションの一部屋を稽古場にして、すごく小さく作品を立ち上げていったんです。

なので実際に劇場へ入ると想像以上に広く感じて「ちゃんと届くかな」と、少し戸惑った部分はありました。お芝居のサイズ感と劇場のサイズ感がちゃんとフィットするといいなという思いで本番を迎えました。

今回細川さんはコンクールで他の団体さんの上演はご覧になりましたか？

初日の最後の出番だったので集中というか、余計なことを考えたくなくて、抗原劇場（アレルゲンシアター）さんの後半10分ぐらいを観て、ムニさんは観られず…。

ムニさんは好きで普段の公演も何度か観ているので、今回の作品も雰囲気というか「こんなことをやるのかな？」というのはなんとなく予想して心の中で楽しんでいました。

二日目の劇団灰ホトラさんとオパンポン創造社さんは全部観ました。

今回のコンクールについて、どんな印象を持たれましたか。

ほろびてもそうですけど、現状に満足している団体はそもそもこうしたコンクールに出ないと思うんです。

どの団体も自分たちの表現を突き詰めていて、尖っていて、次のステップを探している、次の段階に進もうとしている。そういう人たちが集まっているという風に感じました。みんな強い個性を持っていて、それぞれにとんがっていて。そういう人たちと一緒に並んでやれたのはすごくワクワクしたし、刺激になりました。

コンクール開催側としてもそういう人たちを本選に選んだんだな、ということを感じました。

結果に関しても、専門審査員の方が選ぶとしたら、演目とか団体の表現方法を“比較して”とかじゃなくて、それぞれ審査員の興味や関心に近い作品や人が選ばれるんじゃないかなということ漠然と思っていました。もちろん勝手な想像で根拠はないんですけど。だから参加団体側は、ただ自分たちが納得している作品を見せるしかないな、みたいなことは考えてました。

市民審査員、専門審査員の方からも作品について色々なご質問が出ましたが、アフターディスカッションの時間はいかがでしたか？

絶対にあった方がいいと思いました！

ほろびてでも去年OFF・OFFシアター（下北沢）で公演を行った時に、毎回終演後にトークイベントではなくて、残ってくれたお客さんとただ対話をする「トークサロン」という場を30分ぐらい設けていたんです。



自分の作品に関しては上演のあとに双方向的な対話の時間を作っていきたいです。その作品の理解を深めるためにも、いろんな発見をするためにも。だからアフターディスカッションも、アーティストと観客お互いのためになる、すごくいい試みだなと思いました。

ただ専門審査員の西尾佳織さんがその後Twitterでつぶやかれていたように、やっぱりああいう場ではどうしても「作」「演出」の方へ言葉が偏ってしまうので、俳優の人たちが作品をどう捉えたり演じていたのかという言葉拾うことができたのもっと良かったと思います。そのためにも時間がもう少しあれば良かったなと思いました。

市民審査員の方々の中にはご自身の感じたことを言葉にすることに慣れてなかったり、モヤモヤする気持ちをすぐに質問に乗せられない方もいると思うんです。ほかの人の話を聞きながら、時間が経っていくことで自分の中にだんだん言葉が生まれてきたりしますし、やはりもう少し時間があるとより良くなるんじゃないかなと思いました。

ほろびてさんで行われる上演後の対話というのは、フラットにお客様と話をするという感じなんですか？

客入れの段階で「終演後に作家の細川と意見交換の会（トークサロン）があります」ということをお知らせして、終演後に僕がただふらっと客席に行きます。ご興味があればどなたでも喋っていいし、喋らずにその場にいるだけでもよくて。

作品に関する質問でなくてもいいので、芝居を観たことで心が動いたことを消化をする場所、きっかけとして参加してもらえればなと思いました。

僕とぜんぜん面識がない方も何人か残ってくださって、色々と思ったこととかそれぞれが今興味あることなどを話してくださる場になりました。

特にお互い名乗りもせず、っていうのがとても気持ちいいんです（笑）。

いわゆるアフタートークというような「舞台の上」と「客席」という関係ではなくて、もっとフラットな場ということですね。

上演する側の話を厳かに聞くということではなくて、お互いに「この話題どう思います？」とかそういう話から始まり、思ったことを話してもらおうということをやっていました。

今年1月の公演でもやろうと思ってたんですけど、やっぱりどうしてもコロナの影響がありまして断念しました。

そうしたトークサロン、アフターディスカッションのような形で観客の方からそういうフィードバックや感想を受け取ることで、それが次の作品のモチベーションやインスピレーションになったりしますか？

完全になりますね。たとえば疑問や否定の言葉も、SNSでは書きづらかったり、想像以上に攻撃的に膨らんでしまったりするものですけど、生の声だとその場で応答できるので思わぬ着地ができてりするんですよね。それは次の作品のタネになったり心に長く残ったりします。

「わからなかった」という言葉や、否定の言葉もそうなんですけど、その場で自分の声を使って率直な意見を届ける行為って、発言者という形で責任も引き受けることになりますよね。それって潔いというか、ちゃんと好奇心を持ってもらえているんだ、とこちらも思えるというか。

作り手の方も「（観てくれた観客が）否定したくなる」ことに全てとはいいませんけど、それなりに責任は生じると思うので、そう思わせてしまった作品を自分はどう捉えていて、本当はどう感じてもらいたいのか、肯定してもらえるように作品をもうちょっと練り直したいのか、その意見は次の作品で活かすのかどうか、といったいろんな思考に繋がります。

やはり生の声というものはすごく大きいんじゃないかなと思います。

また去年のほろびでの公演の話になってしまうんですけど、トークサロンであるお客さんから「このシーンがちょっとよくわからなかったし、うまくいっていないんじゃないか？」という話が出た後に、別の客さんから「いや、あのシーンはきつとこういうことなので、あれでうまくいってると思いますよ！」という言葉が出て。

作品を通じて議論が生まれたんですね。

そうしたお客さん同士、作り手同士、あるいは作り手と観客といったいろんな視点が入ることで発見が生まれて来るといえるのか、作り手だけの言葉が完全な真実ではないと、僕はやっぱり思うので、いろんな意見が知りたいです。その上で理解できなくても、「こんなに違う考えの人がいるんだ」と知ることに繋がる。

批評家の方やお客さんが「この作品は、こうなんじゃないか？」と語る言葉もすごく大事なものだと思っているので、そういう風に言葉でも作品を育ててもらいたいと思っています。

コンクール後に専門審査員の西尾さんから「もっと俳優の声を」という声もありましたし、アフターディスカッションの中でも専門審査員の多田さんから俳優の藤代さんに質問がありました。

ほろびてというカンパニーの中でもクリエイションの中の様々な演出上の取捨選択や、そのシーンがどう良くなるかということについて、演出、劇作の細川さん自身俳優やスタッフの方との対話を大切にされていますか？

そうですね。結構長い間、権力構造というかハラスメントの構造が生まれにくい、生まれないような稽古場にしたいということを考えてきました。そのためにも対話は絶対に必要です。

創作でうまくいっていない所というのはその問題が戯曲にあるかもしれないし、その俳優がうまく消化できず納得できていないまま稽古をしているという場合もあるので、そこはもう徹底的に話を聞くというか、どんな形でも話をして解消していきたいと考えています。

稽古でやりたいことは作品作りであって、人間性の否定ではないので。僕も俳優として演じることがあるのでわかるのですが、俳優ってどうしても自己否定に走りがちというか、うまくできないとやっぱり落ち込むし自分を責めてしまうんです。

でもそれは俳優の問題というよりは作品とのフィッティングがうまくいっていないだけです。なので人間の尊厳は最低限保てるような対話を、できるだけ大切に重ねていきたいと考えています。それでも難しい時は難しいなとは思いますが…。

やっぱり最終的に上演は俳優のからだを使うので、台本を最低限「読む」ことは必要ですが、その先で俳優ができること／できないことを選んで、できることの方をちょっと膨らましていきたいと思っています。できることとか、あるいは楽しめるようなこととか。そのためにも対話は必要ですね。

作品づくりは本当に難しくてもうまくいくこともありますしうまくいかないこともありますけど、でも対話はとって大事にしています。僕が王様にならないように、と思っています。

グランプリを受賞されてみて、せんがわ劇場で今後「こういうことにチャレンジしてみたいな」「せんがわ劇場でこういうことがやってみたい」という構想やイメージがありましたら教えてください。

このコンクールへ応募する時に書いた応募用紙に「せんがわ劇場で3年間かけてなにかやるとしたら、どういうことをやりたいですか？」という設問があったと思うんです。

そこに書いた「仙川に暮らす日本国籍を持っていない、外国籍の方々がどういう風に生きて生活してきたか」ということをリサーチしながら作品づくりをやっぱりやってみたいなと思っています。



また、もし僕がDEL（※1）に参加するのであれば、一番にしたいのは雇用条件の改善といえますか。夢物語かもしれないし、いきなり何を言うかと思われるかも知れないんですけど。

先日のDEL説明会でワークショップの報酬の目安を伺ったんですけど、なんとかいろんな予算や仕組みでアーティストがもっと貰えるようにならないかな、ということはちょっと思いました。

いわゆる商業資本の舞台とは違う形で表現を追求する人達も、舞台芸術活動を通じてふさわしい対価を受け取る。財源のことは十分意識しながらになると思いますけど、そのことはもっと主張していいんじゃないかと僕は思っています。

説明会を受けた時に「僕たちが生活費のことをあまり考えずに、仕事に集中できるくらいの報酬がもらえたらいいな」「責任や自覚、技術、仕事に対する対価が「よし、全力でがんばろう」と掛け値なしに思えるくらいうれしいものだ」といいな」と思ったんです。

今の仕組みへの批判ということではなくて、自分に関わるなら、これから先そういう風にしていかないと自分は続けられないかも、と思いました。

（※1）DELとは、ドラマ・エデュケーション・ラボ(Drama Education Labo)の略。地域の皆さんへのアウトリーチ事業を行うために、せんがわ劇場が独自に始めたシステムを、こう呼んでいます。演劇のワークショップを通じて、コミュニケーションの力や想像力を引き出し、普段の生活に役立てることを目的としています。

今後のほろびてさんの展望として、稽古場インタビューでも「なるべく長いスパンでクリエイションに取り組んでみたい」という風におっしゃってくださっていました。

来年には今回のグランプリ受賞公演が控えますが、この先1年をかけてチャレンジしていきたいことや、何か取り組んでいきたいテーマみたいなものはありますか？

長いスパンをかけてクリエイションをするためには、僕だけではなくて並走してくれる俳優とスタッフも必要になってきます。

皆さんそれぞれフリーだったり、吉増さんだったらナイロン100℃という母体もあるしで、なかなか俳優というセクションが定まらないのですが、この1年で何かが出来るとしたら…。

とにもかくにも来年の5月に劇場が使えることが決まったので、それに向けて何か…、何かやりたいと思います。とてもぼんやりしていてすみません（笑）。

細川さんご自身は今度さいたまネクストシアター（さいたま市）での脚本の執筆のお仕事があり、ほろびてもこの後6月中旬に『あるこくはく』の再演、11月には北千住BUoY（足立区）での新作公演予定があります。その先も、なにか決まっていますか？

今年だけなんですよ、こんなにみっちりしているのは。ほろびては僕が決めないとなんも決まらないのですが、僕が何も決めていないので来年以降はせんがわ劇場での受賞公演以外の予定は、今のところ何も…。何かを決めないとなん（笑）。

アフタ・ーディスカッションでも、去年の段階では「とある政治的な事件」に関するお話の構想があったり、今年であれば入管の問題や外国の方に対する不当な扱いに興味があるというお話が出ていました。ほろびてではそのときどきでグッと心に刺さるようなテーマがあって、それに対応するように新作を書き下していくという感じですか？

そうですね。その時の衝動というか、強い憤りみたいなものが割ときっかけになることが多くて。その憤りのもっと底の方には「差別」であるとか、もっと漠然とした、誰もが感じている大きなテーマというのがあると思うんですけど。

毎回具体的に作品を立ち上げる時に「今、上演するのにふさわしい」描き方であったり題材というのがあるんじゃないかということは探してしまいます。

演出家の栗山民也さんが一昨年（2019年）の読売演劇大賞の授賞式のスピーチで「劇場には真実があるという言葉に出会った」というお話をされていたのがずっと心に残っていて。政治家やメディアの言葉の何が本当かわからないという時代に、今日本もなりつつあるというか、なっているんじゃないかと思っています。

だから少なくとも劇場で肌で感じられるお話、物語、言葉達というのは信ずるに値する価値もってほしい。

そのために、そのタイミングで上演される意味を強く持った作品を毎回つくっていったらという思いがあります。

今年の1月に上演された『コンとロール』は権力構造と加虐性、今回の『あるこくはく』でも差別の問題や、想像できないことによる暴力が強い印象をもって描かれていたように思います。

またアフターディスカッションでは「今の日本社会における年長者世代への憤り」ということにも言及されていました。

先ほど「（創作現場で）王様にならないように」ということも仰っていましたが、例えばそういう父権的なもの、年長者世代への憤りというのも、細川さんの創作の強いモチベーションとしてあるんでしょうか。

世代というよりは力を持っている人、ということかも知れないですね。僕もそれなりに年齢を重ねているので、「あっ」と思うのですが、普通に使っている言葉も、20歳下の人に使えば何らかの力がくっついてしまうなって。

その力の使い方が間違っていないかをここ数年、よく考えるようになりました。

『コンとロール』だと、その力を他人事として娯楽的に他者へ使う人、『あるこくはく』に出てくる「父」はそういう力を意識的と無意識的の両方で使ってしまう人、みたいに登場させて。マチズモや権力、暴力性、僕がいやだなあと思っているものをできるだけ正面から取り扱う、というのは気を配りました。



細川さんのお話にあったように権力構造を作らない創作姿勢であるとか、俳優さんやテクニカルスタッフの方との対話を是としてつくられていることとか、今年ファイナリストの方々もそういうスタンスをとられる団体が多いのかなという印象を受けました。世代による創作姿勢の変化と伺いますか。

僕達よりも上の世代が作ったものでいいものもたくさんありますけど、今から考えたら間違った作り方をしている部分も多いと思うんです。

そういう、昔から続いてきた作り方じゃない方法でより良いもの、すごく豊かなものが作れるんじゃないかというのが、今の僕たちであったり、僕たちよりも下の世代の人たちがやろうとしていることだと思うので。

俳優と演出家と劇作家がそれぞれ自分の仕事をするというのは前提として、それぞれが対等に話し合える場所として稽古場があって、安心して作品作りに集中できるような環境づくりを意識的に取り組んでいる団体はたしかに多い気がしますね。

そういうクリエイションをずっと続けていきたいし、そういう人たちが増えていくといいと思います。

ありがとうございます。とても希望のあるインタビューだったと思います。最後に一言、お願いします。

やっぱり参加したファイナリストの他の団体の皆さんともっと仲良くなりたかったというのが心残りではあります。無責任なヨイショでもなく、僕が観られたものについて各団体「おお！」って興奮した事が多かったのです。

この先も何かあれば助け合いたいですし、舞台芸術を続けていけるような環境づくりということについても少しずつ繋がりを広めて、手を取り合いながら進んでいけたらいいなと思います。

今回コンクールへ参加できて良かったです。

(以上)

聞き手：松本一步（演劇コンクール制作助手・第8回コンクールファイナリスト）